

Title	<書評>EMMA WOO LOUIE, "CHINESE AMERICAN NAMES : Tradition and Transition", McFarland & Company, Inc., Publishers, 2008
Author(s)	久山, 健太
Citation	年報人間科学. 31 P.241-P.246
Issue Date	2010
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4213">https://doi.org/10.18910/4213</a>
DOI	10.18910/4213
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

EMMA WOO LOUIE  
*CHINESE AMERICAN NAMES*  
*Tradition and Transition*

McFarland & Company, Inc., Publishers 2008

久山 健太

はじめに―中国系移民のアイデンティティ

移民を対象とする研究においては、移住の歴史の経緯や経済活動など、さまざまな視点・方法論による分析が蓄積されている。現代では移民の世代交代が各国で進んでおり、アイデンティティの概念がとくに重要度を増している。<sup>(1)</sup>

出身国に強い愛着を持つ移民二世と対照的に、移住先の国で生まれ育った二世以降の人々をみると、たびたび出身国に対する帰属意識を欠いていたり、二つの国の間で自己のアイデンティティが揺れ動いたりしている。十九世紀以来の歴史を持つ中国系アメリカ人に関しては、この問題はいつそう複雑なものになっている。<sup>(2)</sup> 出稼ぎという意識が強い初期の移民、人種差別を受け白人社会への同化を志向した二十世紀初頭生まれの世代、強い民族意識を抱くようになった若年層、米中の懸け橋になるうとする新移民と、移住や出生の時期によって、「中国人であること」に対する意識は大きく異なる。また、「中国」でなく「台湾」系アメリカ人と自称する者、東南アジアからの中国系移民<sup>(3)</sup>（再移民）なども考慮すれば、中国人にとって重要な「出身地」をだけを見ても、はなはだしく多様である。

中国系移民のアイデンティティを把握する指標としては、あらゆるものが候補となる。例えば従来の研究では、日常に残る慣習、中国色の濃い同族企業の形態などが採用されてきた。今回取りあげる『Chinese American Names』は、彼らの「名前」に着目した著書である。<sup>(4)</sup> 本書は一九九八年の初版の装いを改め、二〇〇八年に文庫版として再版されたもので、中国系アメリカ人の名前の起源と変遷、またそれに付随する各

種の社会現象を論じている。名称学 (onomastics)、歴史学の研究という性格が強いが、社会学的な視点・方法論も積極的に取り入れられており、本稿では移民研究、あるいはアイデンティティ論の文献として捉え直したい。

著者を簡単に紹介しておこう。E・W・ルイは中国系アメリカ人二世の名称学者、歴史学者である。同じく二世である夫ポールとともに、Chinese Historical Society of America (CHSA) のメンバーとして積極的に学術的な活動を行っている。その一方で一九六〇年代以来、ルイ夫妻は公民権運動にも力を注いでいる。当時カリフォルニアでは、住居に関する有色人種への差別を合法化しようとする動きがあり、彼女らはそのような政治団体への抗議活動を展開した。<sup>(5)</sup> 本書は著者の中国系アメリカ人研究の集大成として、自分たちのルーツを明らかにするとともに、アメリカにおける苦難の歴史をも伝えるものである。

### 内容紹介

本書の内容を簡単に紹介する。第一部「中国の名前の伝統」では、名前の文化が形成された歴史的経緯や、個々の慣習を紹介している。中国の家名は伝説時代から周代にかけて形成され、秦代で現在の形に整理されたといひ、その由来は地名、著名な父祖の名、社会的身分・階級などであるといふ。

紹介されている慣習のうち代表的なものをあげると、一族の同世代の子供の名前に共通の漢字を入れるという「排行 (Pai-hang)」<sup>(6)</sup>、同姓 (氏)<sup>(7)</sup> の男女間での婚姻を禁じる「外婚制」などがある。そのほか、一人っ子

政策施行後 (一九七〇) に、母方の姓を子の個人名の一字字に含めるという慣習が生まれたことなどを紹介する。

第二部「アイデンティティの手掛かりとしての名前」では、「中国系アメリカ人」の定義にまつわる議論、移住を契機とした名前の変化を紹介する。まず興味深いのは移民の世代の教え方で、日系人は一般に「二世」と数えるのに対し、中国人は家族単位での移動があったり、本国への帰還も頻繁に行われることから、何代目の「アメリカ人」なのか定義することが難しいという。

また「中国系」といつても、すでにその内部で多様性が存在する。多数派を占める出身地や方言が時代ごとに変遷したことや、言語・方言や表記体系の違いから、同じ姓でもさまざまなアルファベット表記が派生したことが紹介されている (例えば、「謝」という姓では Char, Dare, Hsieh, Xie などのバリエーションがある)。さらに、アメリカ風の命名様式に順応する人々も次第に増加し、姓と個人名の順序やイニシャルについても、表記のバリエーションが生じたという。

第三部「中国系アメリカ人の名前の慣習」では、引き続き移住に伴う名前の変化を挙げ、さらにアメリカ社会に融け込む過程で新たに生じた名前の慣習を扱っている。膨大な移民が押し寄せた十九世紀後半には、「paper son」という違法移民が横行した。これは中国に一時帰国した者が、出稼ぎの可能な息子がいる家庭に籍を売りつけたもので、アメリカの中国人家庭に生まれた子供の男女比が、公的記録の上では極端に男性に偏るといふ現象が生じた。さらに、書類上の名前と本名が異なるという現象も頻発した。姓が食い違っている事実は、一九七〇年代まで公にしば

らい状況であったという。

また二十世紀初頭には、多様であった中国系アメリカ人の姓の綴りが、安定する傾向にあったという指摘がある。当時は厳重な移民制限政策がとられていたが、それよりもむしろこの時代の移民の性質、すなわち家族を形成しない労働者層が大多数であったことが影響したとともみえる。一般的に家族が増えると、親子で別々の表記を採用するなどの多様化が生じるとのことである。

中国的な名前には差別や誤記・誤読がつきものであったので、自ら改名した場合もあった。例えば元の中国語の発音と似た欧州系の姓を名乗る(雷→Louisなど)、綴りを欧州系の姓に似た形に改める(盤:Pon→Pondなど)といったもので、まれに漢字を意識する例(石→Stone)もある。さらに名前それ自体はアメリカ風であるが、命名に関する中国の慣習を、変形させつつ継承している場合もある。地名や偉人にちなんで命名するという慣習や、先述した「排行」をアメリカ風の名前で実践する(例えばMarjane, Mary, Rosemaryと「三姉妹は「marty」)という綴りを共有している)、というものである。その一方で、中国には本来ない慣習も生まれている。元来儒教圏では、父祖の個人名に使われている漢字について、子供の名前に再使用することを禁忌とした。しかし中国系アメリカ人は、逆に親子で全くの同名を持つという欧州由来の命名法を受容し、中国風の名前に「Jr.」「Sr.」を付ける例(Hing Owyang, Jr.など)が出てきた。またアメリカに最初に渡った世代の先祖の名前を、自分の姓として使っている例も多々見られるという。これには、先祖に敬意を表した、あるいは住民登録時の記録ミスがそのまま残っ

たといった移民特有の理由がある。

そのほか中国系移民の重要な話題として、「家族会館」を扱っている。これは特定の姓を名乗る人々のみから構成される、互助的な組織である。特定の姓が集中するチャイナタウンでは、その一族の団体が町全体に影響力を行使してきた。しかし若い世代や新移民が加入を嫌がるようになり、一九六〇年代からは、こうした団体の衰退が報告されるようになる(一部資金力を維持する例もある)。現在ではその役割を変えつつあり、政治的影響力の行使というよりも、社会的活動が主になっている。子弟に奨学金を用意する、海外の同姓の団体とともに会議を開く、といったものである。また、中国文化・哲学の教育を目的として新設されたものもあるという。

第四部「姓の漢字には何が込められているか?」では、同音だが異なる漢字表記を持つ姓について説明する。さらに、いったんアルファベット化した姓について、元々の漢字を復元する作業の困難さを論じる。ルーツ探しの一環として漢字を知ろうとする人々もおり、彼らが利用可能な資料として、族譜、墓碑、移民当時のケース・ファイルなどを挙げている。最後にはこれまでの内容を要約した上で、自己あるいは他者を知る指標として、名前の重要性を再度強調する。

#### 本書の意義と今後の展望

本書は、単に既存の知識を概論的にまとめたものではない。聞き取り調査の結果や移民管理局などの個人記録を分析し、新たな知見として中国系アメリカ人の名前の多様なバリエーション、またそこに反映された

複雑なアイデンティティや移民をめぐる社会環境を、詳しく記述する。中国における姓の歴史的経緯については既知の内容も多いが、中国の慣習がどう変容し、またアメリカ社会の慣習と融合したかという移住後の実態について、体系的に論じた文献は本書が初であろう。

名称学的な研究としての本書の意義は大きい。以下では社会的な意義、とくに移民のアイデンティティを研究する上で、本書が資すると考えられる点を指摘する。まず、異文化接触の副産物の実例として、初期の移民にまつわる数々の現象が参考になる。例えば「paper son」に關していうと、書類上の名前が本名と食い違っていることについて、移民の初代と末裔との間で興味深い意識のコントラストが生じている。初代は名前を犠牲にしても、つまり今後の人生を偽名のまま送ることになるうとも、アメリカへの渡航を達成しようとした。これに対し、彼らの末裔は自分の名が持つ違法性を重く受け止め、その事実を二十世紀後半まで公表しなかったのである。

さらに、中国系移民のアイデンティティには、いくつかの層がある可能性を指摘できる。移民の名前にみられる米中折衷の形式、例えばそれ自体はアメリカ風であるが中国的な特徴を持った個人名からは、中国（人）という出身の文化圏単位でのアイデンティティが背景にあることを読み取れる。これに対し、同姓の一族から構成される家族会館の事例では、中国人（エスニック・ゲッターとしてのチャイナタウン）という大きな枠組みではなく、より限定された同族としてのアイデンティティの共有が根底にあり、姓がその表徴となっている。<sup>8)</sup>

家族会館の存在自体は、中国人の同族意識の強さを物語るファクター

として、他の文献でも紹介されている。<sup>9)</sup>しかし本書では、この集団が時代を経てその性格を変えているところまでを指摘している。中でも中国文化の継承を目的とした団体の事例は、一族であると同時に中国人であるという、両面的・融合的な性格を示している点で興味深い。助け合いの精神はあれども、同姓以外の者に対しては排他的な営利集団という性格が強い組織であったが、これが中国系のアイデンティティを再生産する拠点になりつつあるのかも知れない。<sup>10)</sup>

本書の知見や方法論は、日本におけるエスニシティ・外国人のアイデンティティを把握する上でも、多大な利益を生むと思われる。移住者や日本国籍取得者が増えつつある現在、個人の内面と社会環境との結び付きを把握する必要も高まっている。この状況において、名前は指標としての大きな可能性を秘めているのである。

#### 注

(1) Z・パウマン(二〇〇七)は後期近代化社会を「リキッド・モダニティ」(グローバル化が加速する流動的な時代)ととらえている。個々人は絶え間ないアイデンティティ不安に襲われる一方、さまざまな次元・規模のアイデンティティを自ら選択・再構築する状況が生まれているという。

(2) 曾(二〇〇一)はサンディエゴの中国系移民社会の事例をあげ、新旧の移民とその子孫を類型化した上で、全体に適用し得るアイデンティティ形成のモデルを提唱している。その内在的要素としては「チャイニーズ・アメリカンネス(米中の政治や文化の影響を受ける)」、外在的要素としては居住期間、

エスニシティ、受け入れ側の社会の態度、教育・社会化が挙げられている。

- (3) 須山ら(一九七四)によると、陸続きの東南アジアには古くから大勢の中国人が移住している。彼らもまた出生地や移民時期によって、アイデンティティに大きな差異が存在するという。

- (4) アイデンティティの問題を考える上で、名前は重要な指標となる。異なる文化圏・言語圏において、移民の名前は発音や表記が難解・奇異に感じられ、しばしば誤記されたり、差別の対象となる。グリーン(一九九七)は東欧系アメリカ移民がこうした社会的障壁に直面し、改名すべきか悩むという事例を紹介している。

- (5) 夫妻の経歴は、サンフランシスコ州立大学のホームページ <http://www.sfsu.edu/~fnaid/scholarships/donor/oid7.htm>で紹介されている。

- (6) 本文中では分かりやすい例は紹介されていないが、例えば毛沢東の弟の一人は毛沢民という名で、彼らの世代は「沢」の文字を共有している。

- (7) 「姓」「氏」という語はともに「家名(family name)」の意味を持つが、厳密にいうとそれぞれ異なる別の意味も有しており、区別されるものである。しかし本稿では便宜上、家名を指し示す語としては「姓」を一貫して用いることにする。

- (8) Ooi(2008)によると、初期のシカゴ移民は別姓の集団同士で暴力的な抗争がたびたび生じるなど、「中国人」というよりも排他的な同族意識が先行していた。

- (9) 須山ら(一九七四)など。

- (10) このような家族会館の変化は、バウマン(二〇〇七)の議論を参考にすれば、流動的な時代の中で翻弄されながら、構成員が自分たちの帰属対象を模索

していることの表れ、と捉えることもできる。

#### 参考文献

- 須山卓・日比野丈夫・蔵居良造 一九七四 『NHK ブックス二〇二華僑改訂版』 日本放送出版協会。
- ナンシー・グリーン 一九九七 村上伸子訳 『知の再発見』 双書六〇多民族の国アメリカ移民たちの歴史』 創元社。
- 曾纓 二〇〇一 「中国系アメリカ人社会のアイデンティティ―サンディエゴのケースを見て」 游仲勲編 『21世紀の華人・華僑 その経済が世界を動かす』 ジャパンタイムズ 一九九〇―一九九二頁。
- ジグムント・バウマン 二〇〇七 伊藤茂訳 『アイデンティティ』 日本経済評論社。
- Ooi, Yuki, 2008. "Becoming Traditional Through Assimilation: Emergence of National/Ethnic Identity Among Chinese Migrants in Late Nineteenth-Century Chicago." *International Journal of Japanese Sociology*, 17: 77-90.

